

## 「JENESYS2.0」2017年度中国青年メディア関係者代表団第3陣 参加者の感想（抜粋）

### 【第1分団（科学と発明）】

○ 訪日前の日本人に対するイメージは、「礼節を重んじ、細やかで、品位があり真面目だが、生活面ではストレスも大きい。中国に対しては微妙な、ある意味友好的とはいえない感情を持っている。そして、発展した経済、清潔、高度に発展した工業、伝統を重んじ、天然資源は乏しいが科学技術は相当進んでいる」というものだった。

しかし活動を終え、次のような印象を持った。まず、日本人の丁寧さは徹底しており、心から礼を尽くし、我々に対しても真摯に心を込めて接してくれ、我が家に帰ったような気持ちになった。日本は真の意味で先進国であり、都市と地方の格差は少なく、どこで生活しても便利で、科学技術も発達し、その成果の転化を重視していた。

科学技術が地方経済の発展にどう寄与しているのか、それが今回の旅のテーマだった。中国で科学技術政策を研究する学者は、日本の専門的科学サービス機構である国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）を研究対象にしている。JSTは基礎研究、応用研究、研究の産業化において数多くの卓越した成果を上げている。また科学研究者が創業する際に、経済面や人的な支援を行い、創業時の問題解決をサポートしている。山形県工業技術センターは、県内の中小企業の中核的役割を担っており、技術は最先端ではないが、本当に役立つもので、実際に地域住民が恩恵を受けていた。また、鶴岡市では大学と政府の協力の下、慶應義塾大学による先端バイオ研究が展開されており、人材を呼び込み、産業エコシステムを形成していた。また、現地のバイオ医薬関連産業を集積させ、現地の高校生に科学に触れ、研究に参加するチャンスを提供し、将来の人材育成に貢献していた。大学・企業・政府連携のモデルケースとして、非常に参考になった。

国民の科学的素養の向上、それが二つ目の収穫だった。イノベーションと科学知識の普及は中国では「車の両輪」と言われるが、科学知識の普及面では、まだ不十分な点が多い。国立科学博物館やTEPIA先端技術館では生き生きとしたイメージの湧く展示を見た。TEPIA先端技術館では中高生にロボットの設計や研究への参加を促すプログラムが組まれていた。また、鶴岡市立加茂水族館では、毎日クラゲの給餌解説を行っており、各成長段階にあるクラゲを顕微鏡で観察することで、クラゲの成長過程を学ぶことができ、科学の普及という職責を果たしていた。中国でもより多くの機関が科学普及活動を行い、より文化的な手法で科学的思考や方法を広めるべきだと思った。

○ 日本政府は科学研究を非常に重視しており、「産学官連携」という持続可能な長期的戦略を打ち出している。それにより、大学などの科学研究機関を支援し、高齢化や近未来の生活、そして、地域発展の不均衡といった現実的な社会問題を解決するため、専門的な技術開発を行っていた。また、企業のマッチングやベンチャー投資により市場化を実現し、科学研究を人々の生活に応用していた。

この他、日本人の礼儀正しさ、決まりと秩序を守る、原則を重んじる、懸命で真剣な態度が

印象深く心に残っている。

「科学と発明」のテーマに沿った訪問では本当に多くの成果を得た。全体を通して、日本人は真摯に事に当たり、規則に従い、民族の文化に強い誇りを持っていると感じた。まず感じたのは、「民から得たものは、民に使う」ということだ。東京や山形県鶴岡市の科学技術機関への視察・交流を通し、各地に地域の特色ある資源や優位性のある産業が存在することを学んだ。地域の科学研究機関はそれらを生かすべく、伝統的な開発や生産モデルに縛られることなく、現地政府の計画や支援に基づき、日々拡大する住民のニーズや市場の発展状況を鑑みながら、技術改良や品質向上を行い、人々の生活の質を最大限向上するよう努めていた。

次に、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えている」と感じた。日本政府は科学技術研究の人材育成を重視し、継続的な研究開発の展開に向け、長期計画と目標を設定していた。学生に向けて一連の関連活動を展開し、選抜制度を導入して学生の興味を刺激し、研究開発を奨励するため素晴らしい環境を作り出している。

そしてホームステイでは、ご家庭から温かく迎え入れて頂き、異国でぬくもりと優しさに触れることができ、とても感動した。

○ 今回の訪問では多くの印象深い思い出が残った。読売新聞東京本社、テレビユー山形、慶應義塾大学先端生命科学研究所、天童木工などを訪問し、メディア界や科学技術分野に対して直接的な理解が深まった。最も印象深かったのはわずか一日のホームステイだ。我々を迎え入れてくれたおばさんは友好的で温かく、食事の用意からお酒にお茶、一緒に歌ったり、雪を見たり、まるでご近所のように親しく接してくれた。言葉での交流は完全とは言えなかったが、それが友好を妨げることはなく、偏見やわだかまりもなかった。自ら体験した思い出は、どんな言葉や文字より記憶に鮮明で、感動を刻んでくれた。別れの時、おばさんはバスの窓に向かって何度も手を振っていたが、バスが動き出すと、懸命に後を追いかけて来た。まるで旅立ちの日、自分の祖母に見送られているような錯覚を覚えた。再会が叶うか分からないが、日本人との生活を身を以って体験した思い出は、今後、日本での思い出の一コマとして永久に残っていくだろう。こうした経験を友人やメディアの同僚に伝え、日本をもっと理解してもらいたい。真実は誤解を解き、友情を育む。だから一般の人々の交流が進めば、中日両国の関係もより明るい方向へ向かうはずだ。これも訪日活動の成果の一つであると確信している。

○ 慶應義塾大学先端生命科学研究所の訪問を通じて、科学教育の面で以下のような感想を持った。

ここでは、高校生に研究助手を担当させて多くの学習の機会を与え、研究所と学生双方の長期的発展にメリットを生んでいた。また、特別研究生制度では、毎年、高校生バイオサミットを開催し、バイオロジーの分野に意欲ある学生に更なる向上のチャンスを提供していた。毎年、全国各地から 300 名の高校生が一堂に会し研究成果を発表、大学が評定を行い、学生のイノベーションへのやる気を大きく刺激していた。また、研究所の規模拡大に伴い、施設内に 2000 平方メートルの室内保育所を併設し、冬季の児童の遊び場問題を解決していた。

こうしたシンプルないくつかの事象から、日本では科学技術の発展および青少年から大学生

の教育において、各施設が長期的視野に立ち、系統立てて取り組んでいることを理解した。

メディア訪問では、読売新聞東京本社での視察で感じたことを述べたい。科学技術、文化、生活など異なる紙面の担当者 20 名ほどが時事ニュースに関する討論を行ったが、各分野からの意見を聞くことで、一部の読者の見方を知ることができた。このような大衆の意見を汲み上げる方法は、ぜひ見習うべきだ。また、青少年向け新聞の発行を通し、若者の新聞を読む習慣を養っていた。

日本は産学官の連携が非常によく取れていた。帰国後は周りの人々に日本の科学技術や教育理念を伝えていきたいと思う。

○ 科学技術をテーマとしたメディア訪問団として最も印象深かったのは、日本の IAB 産業への注力と先進性だった。慶應義塾大学先端生命科学研究所が展開する独自の地域との連携モデルは、中国でもぜひ紹介するべきだと思った。科学知識の普及を推進する国立科学博物館や TEPIA 先端技術館を訪問したが、両親に抱っこされた赤ちゃんから白髪の老婦人までさまざまな人々の姿が見受けられた。また、見学者数の少ない時でも、ガラガラということはなく、国民全体の科学技術に寄せる熱い思いを感じ、科学技術強国はうそではないと認識した。

また、滞在中にテレビユー山形という小規模のテレビ局を訪問した。ニュース報道をきっかけに、継続的な追跡調査を行い、3 年の歳月をかけて制作したドキュメンタリー番組に興味を覚えた。人工の蜘蛛の糸を研究開発したベンチャー企業がテーマで、創始者である学生は、慶應義塾大学と山形県の協力という独特の方法で、NASA も成しえなかった課題を克服したということで、実に称賛に値する。そして、ベンチャーキャピタルの支援を受け、大学発ベンチャー企業を設立し、わずか 1 ミリだった蜘蛛の糸の生産量を年間 12 トンまで押し上げた。こうした実際のニーズに合った研究開発とイノベーション、それを後押しする日本政府と地方自治体の取組みが大変印象深い。

帰国後は、中日両国の関連分野をテーマに特別番組を制作し、両国の違いやそれぞれの長所、短所も比較してみたい。

## 【第 2 分団（スポーツ）】

○ 活動に参加する前は、テレビや映画、ネットから日本に関する情報を得ていた。日本は経済発展が進み、ホンダ、トヨタ、キヤノン、パナソニックなど高品質の製品が中国でも好評を博している。今回の活動を通し、日本の美しい都市環境、発達した科学技術、日本人の友情、友好、おもてなし文化へのあくなき追求が深く印象に残った。

宮城県のスポーツコミッションせんだいのブリーフで、スポーツと旅行の融合による効果創出の取組みを学んだ。仙台国際マラソンでは、マラソン大会と地域の豊富な旅行資源を融合させ、景色を愛でながら走り、大会後はご当地グルメに舌鼓を打つ。こうしたスポーツと観光を同時進行で推進していることが印象深い。

また、全国民参加で青少年の体質改善に取り組んでいた。NPO 法人全国ラジオ体操連盟との交流で、日本人はラジオ体操が健康に役立つことを理解し、いつまでも大切に守っていることを知った。ラジオやテレビでも、毎朝決まった時間に放送されているようだ。中国では高校生

まではラジオ体操をするが、成人してからはほとんど機会がない。

最後に、メディア関係者との交流で、マンパワーを抑え、コストダウンを図っていることを知った。共同通信社や東北放送は、中国と同じようにニューメディアに対する課題を抱えていた。そうした状況で、日本のメディア界はマンパワーの削減、アウトソーシング、ニュースの無料配信、ニュースリソース提供における集金方法などさまざまな工夫をしており、手本となる点が多かった。

○ 今回の訪問では日本文化と日本人の生活を体験することができた。3月30日のホームステイが忘れられない。Kさんご夫妻の温かいおもてなし、私たちの生活習慣への気配りに感謝している。最初、私たちはコミュニケーションがうまく取れるか心配だった。しかし、携帯の翻訳アプリのおかげで、互いの交流もスムーズに進み、Kさんご夫妻も中国の文化や風俗習慣などに多くの興味を示してくれた。その中でも、とても些細なことだが、私が感銘を受けたことがあった。お宅へ向かう道中、おしゃべりの中で、私は冷たい物を飲む習慣がないと話した。日本人は朝の洗顔も飲み水も冷水と聞いていたからだ。しかしお嬢さんが早起きして、温かいお湯を沸かしてテーブルに用意しておいてくれた。これにはとても感激した。帰りに車で送ってくれる途中にも、おばさんがお菓子や飲み物を買ってくれた。仲間が充電器を忘れたことに気付くと、ご主人が急いで車を回して届けてくれた。おかげで遅刻することもなかった。これにはとても感動した。日本人は規則正しく、平和で穏やかに暮らし、子供への教育面でも健全な身体を養い、社会への適応力や生存力の育成に力を入れていた。帰国後は、こうした経験を周りの人たちに伝えたい。

○ とても心に残っていることがいくつかある。

一つは、日本は高齢化がかなり進んでいることだ。東京ではお年寄りがとても多かった。中国も高齢化社会に突入しており、高齢化が日本にもたらす影響、その対処方法などの経験を中国は日本から学べるだろう。

また、日本は大衆スポーツの普及に尽力しており、高い効果を上げている。学生の毎週の運動量、参加するスポーツの種類豊富さは中国人学生を上回る。ホームステイ先のお嬢さんは月曜日から土曜日までバスケットボールの練習に打ち込んでいるようで、中国ではこういう例は珍しい。スポーツは一朝一夕の努力で身につくものではない。中国はスポーツ産業の発展に力を入れているが、大衆スポーツの前途はまだまだ遠い。

そして、メディアとスポーツとの距離が近い。日本の娯楽番組や、朝のラジオ体操などが良い例で、その親密度に中国はいまだ遠く及ばない。日本人のスポーツファンがこれだけ多いのは、メディアが提供するスポーツ関連番組と大きな関係があると考えられる。メディアに関わる者として、如何にして中国人のスポーツに対する興味を盛り上げ、スポーツのレベルや人々の健康水準を引き上げていくのか、これを今後の課題に据えていくつもりだ。

○ 仙台大学での訪問・交流が印象深い。まず、学生に行き届いた教育を実施する教育理念が斬新だった。例えば、スポーツ情報マスメディア学科では、最新設備や技術を導入し、その上、

取材の機会まで与えていた。社会に出て接するだろう業務内容を、大学で事前に学習できるのだ。彼らの将来にとって多くの助けとなるだろう。また、秩序ある管理が素晴らしい。教室でも、練習場でも学生は常に礼儀正しく、自己の力量を把握しながら練習に励んでいた。また、授業を受け持つ教師の精神性が見事だった。各学生の精神面での成長に重きを置きながら身体的な資質を向上させ、勝負のみに終始しない教育理念は素晴らしい。

帰国後は、家族や友人に日本の文化、歴史、スポーツ、風習、商業、都市建設などの状況を伝えたいと思う。

○ 私の業務内容はスポーツと関連があり、スポーツをテーマに訪日活動に参加した。印象深かったことは、アリーナやスタジアム内の人にやさしい配慮だ。ベガルタ仙台のホームグラウンドであるユアテックスタジアム仙台では、ホームサイドに身体障害者専用観客席が設置され、他サイドにも車椅子用スペースが見受けられ、素晴らしいと思った。

またスポーツが全国民に浸透していた。ホームステイ先でラジオ体操が話題に上り、私達も都内で体験したため、皆で一緒にラジオ体操をした。スポーツが人々の生活の隅々に行き渡っているのを肌で感じた。

日本のスポーツ番組は、選手の動作を解析できる先進的なアプリを活用していた。文化面のみならず、科学技術も発達していることを、ぜひ中国の皆に伝えていきたい。